

DATA

データで見る 産婦人科医の実態

産婦人科専攻医登録者を対象に行ったリクルートアンケート結果 (2024年度)

【背景】

近年の産婦人科専攻医数は、2022年の518人をピークに専攻医登録数の増加を得られていない。さらに、2024年には医師の働き方改革が開始され、時間外・休日労働の上限規制が導入されたことで、当直体制を維持するためには一層の産婦人科医師の増員が必要である。一方で、医学生や臨床研修医が勤務地や専攻する診療科を選択する際に求める要素は時代とともに変化しており、産婦人科専攻医数に影響を与える因子の探索は重要である。

【目的】

産婦人科へのリクルートに繋がるように、産婦人科専攻の決定に寄与した因子を明らかにすることを目的とした。

【調査期間】

2024年4月1日～2025年3月31日

【対象者】

2024年度産婦人科専攻医登録者

【方法】

専門管理研修システム用いたオンライン形式アンケート
回答者背景、産婦人科専攻の決定に寄与した因子、産婦人科専門研修プログラムの選択に寄与した因子、COVID-19の影響について、アンケート調査した。

【回収率】

89.4% (431人/482人)

A 背景

項目		人数（割合）
性別	男性	132 (30.6%)
	女性	298 (69.1%)
	回答しない	1 (0.2%)
結婚の有無	未婚	283 (65.7%)
	既婚	142 (32.9%)
	回答しない	6 (1.4%)
子供の有無 (複数回答)	あり	33
	なし	380
	妊娠中	15
	回答しない	7
家族・親戚中の 産婦人科 (複数回答)	両親	49
	祖父母	28
	兄弟姉妹	9
	いない	362
	その他	13

性別は男性132人（30.6%）、女性298人（69.1%）であった。前年(男性34.4%、女性64%)に比べ、女性の割合が増加した。

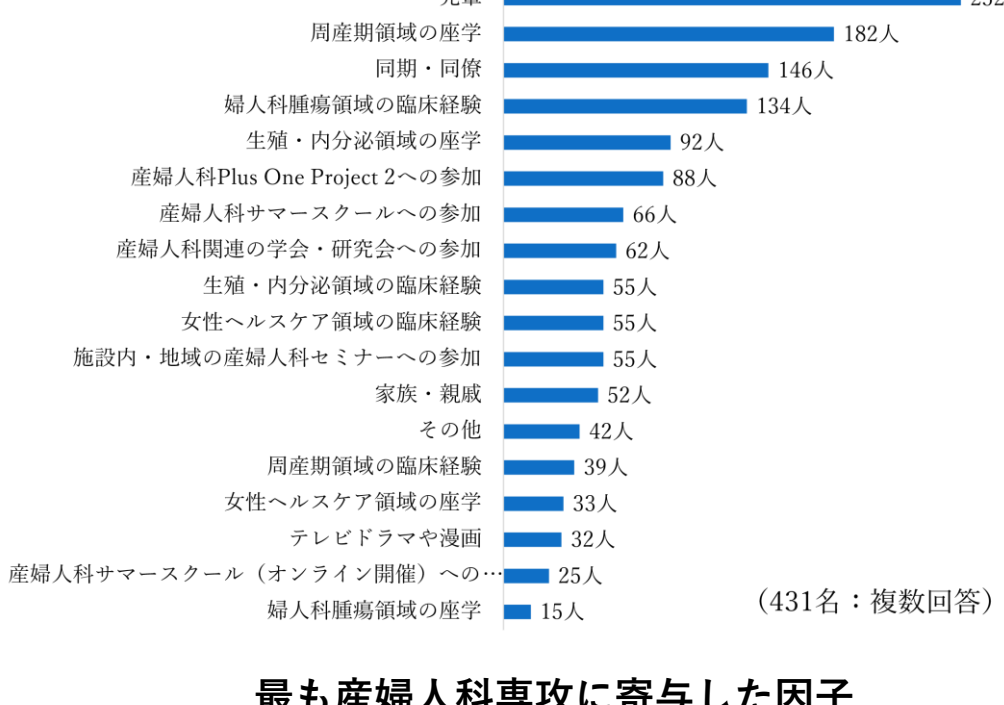
出身都道府県と研修施設の地域

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	
東京都	79	静岡県	7	青森県	3	出身地と同じである
大阪府	35	山口県	7	鳥取県	3	
神奈川県	33	宮城県	7	広島県	3	
埼玉県	18	群馬県	6	沖縄県	3	初期臨床研修施設と同じである
愛知県	18	石川県	6	秋田県	3	
福岡県	18	岡山県	6	山梨県	2	
兵庫県	16	山形県	6	岩手県	2	出身大学と同じである
千葉県	15	福島県	6	愛媛県	2	
京都府	14	岐阜県	5	高知県	2	
北海道	13	滋賀県	5	鹿児島県	2	出身大学と同じである
茨城県	10	島根県	5	福井県	1	
新潟県	9	栃木県	5	徳島県	1	
三重県	9	富山県	4	佐賀県	1	その他
奈良県	8	和歌山県	4	長崎県	1	
宮崎県	8	香川県	4	大分県	1	
長野県	7	熊本県	4	日本国外	4	

研修施設は、昨年と同様に出身地と同じ地域の施設での産婦人科研修が多かった。

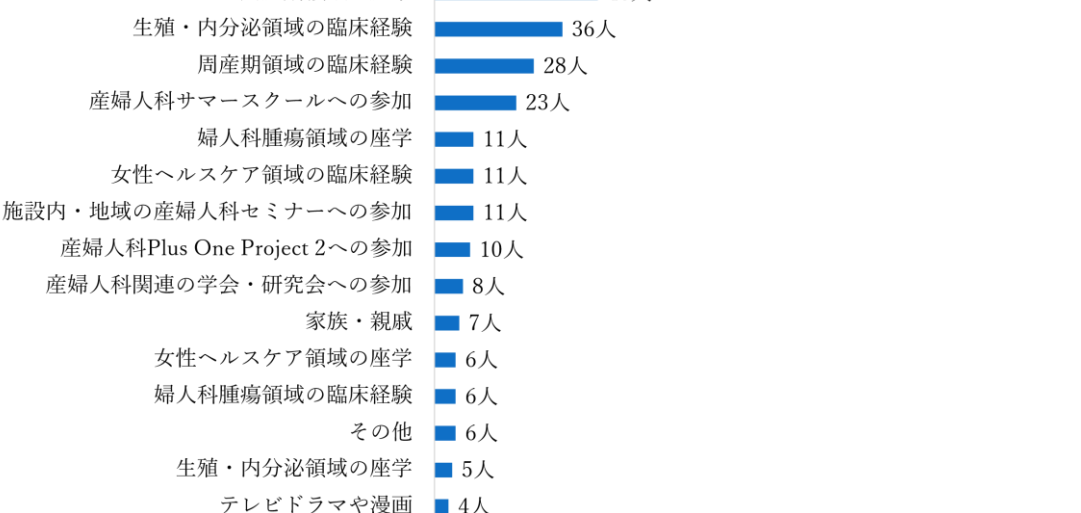
B 産婦人科専攻に寄与した因子

産婦人科専攻に寄与した因子（複数回答）



(431名：複数回答)

最も産婦人科専攻に寄与した因子

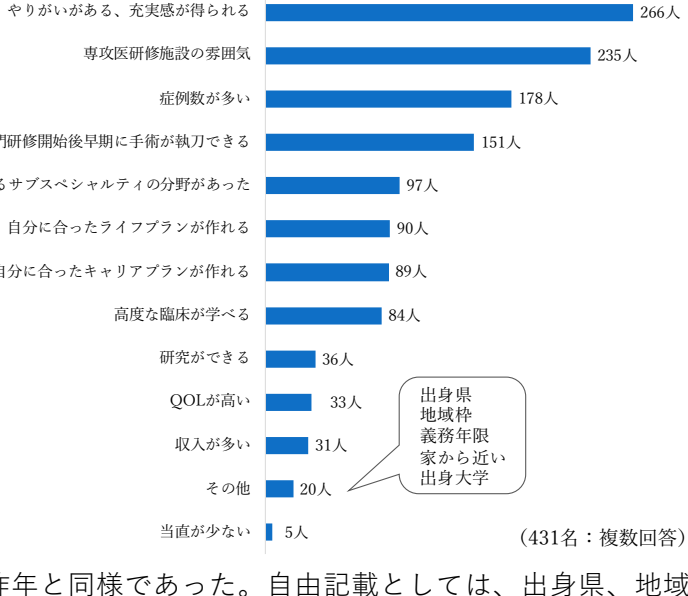


産婦人科専攻を決定する際に寄与した因子として、「先輩」、「同期・同僚」の影響が前年よりも大きいことが明らかとなった（昨年「先輩」4位、「同期・同僚」10位）。一方で、例年上位（昨年1位）の「周産期の臨床経験」は、昨年よりも大幅に下がっていた。

最も寄与した因子についても先輩の影響が最多となった。

C 産婦人科専門研修プログラムの選択に寄与した因子、COVID19による影響

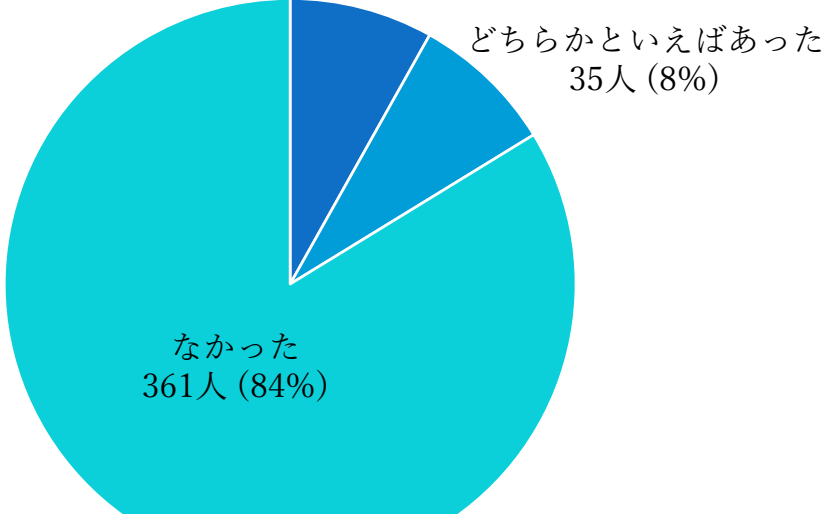
専門研修プログラムを選択した理由



(431名：複数回答)

上位5つは昨年と同様であった。自由記載としては、出身県、地域枠や義務年限、家が近い、出身大学、結婚等が挙げられた。

専門研修プログラムを選択する際にCOVID-19の影響があったか



産婦人科専門研修プログラムにおけるCOVID-19の影響は、昨年と比較し減少していた。「影響があった」と回答した理由の多くは施設見学の制限であった。

D 今回のアンケート結果をふまえた産婦人科を志す初期研修医・医学生の皆さんへのメッセージ

2024年度の産婦人科専攻医登録者を対象としたアンケート結果から、産婦人科専攻の決定に寄与する因子や専門研修プログラムの選択理由について検討しました。本考察では、これから産婦人科専攻を考える臨床研修医や医学生の皆さんに向けて、アンケート結果をもとにした提言をお伝えします。

まず、2024年度の専攻医登録者の男女比は、男性が30.6%、女性が69.1%と、昨年と比較して女性の割合が上昇しました。近年、産婦人科専攻医における女性の割合が7割近くに達しており、女性医師にとって働きやすい環境づくりがますます重要になっています。また、既婚者の割合は32.9%、子どもがいる方の割合は7.6%でした。子育て中の環境でも産婦人科専門研修を開始している先輩医師もあり、ライフイベントと両立しながらキャリアを積むことは十分に可能です。皆さんも、自身のライフプランに合わせて産婦人科専門医を目指すことができます。さらに、家族や親族に産婦人科医がいる方の割合は13.0%であり、身近なロールモデルの存在が産婦人科専攻に影響を与えていることがうかがえます。

次に、産婦人科専門研修施設を選択においては、出身地と同じ地域を選んだ割合が47.8%、出身大学が37.6%、臨床研修施設が39.2%でした。昨年度の結果（出身地：49.3%、出身大学：35.1%、臨床研修施設：37.5%）と比較しても大きな変化はなく、地元志向が根強い一方で、大学や臨床研修施設とのつながりも依然として重視されていることがわかります。皆さんも、自身の生活基盤やこれまでの研修環境を考慮しながら、ライフイベントとの両立を視野に入れて、専門研修施設を選択することをご検討ください。

産婦人科専攻の決定に寄与した因子としては、先輩医師の影響（58.5%）、周産期領域の座学（42.2%）、同期・同僚の影響（33.9%）、婦人科腫瘍の臨床経験（31.0%）が上位に挙がりました。昨年と比較すると、周産期領域の臨床経験が大幅に減少し、先輩医師や同期・同僚の影響が増加しています。これは、COVID-19の影響で臨床経験の機会が減少したことにより、身近なロールモデルとの交流がより重要になったことを示唆していると考えられます。COVID-19による社会的な行動制限が縮小された現在、臨床経験の機会は復帰しており、身近なロールモデルとの交流に加えて、産婦人科の魅力を感じていただく機会が増えることに期待していただければと思います。

また、専攻決定に最も寄与した因子としては、先輩医師の影響（38.5%）、同期・同僚の影響（10.9%）、周産期領域の座学（10.6%）、生殖・内分泌領域の臨床経験（8.4%）、周産期領域の臨床経験（6.5%）が続いています。昨年度と比べて、先輩医師や同期・同僚からの影響を強く受けている傾向にあります。医学生・臨床研修医の皆さんには、ぜひ多くの先輩医師や同期との交流を通じて、自分の将来像を具体的に描いてみてください。さらに、周産期、婦人科腫瘍、生殖内分泌、女性ヘルスケアなど多様な領域の研修に積極的に参加し、その魅力を肌で感じていただきたいと思います。

専門研修プログラムの選択理由では、「やりがいや充実感」（61.7%）、「施設の雰囲気」（54.5%）、「症例数の多さ」（41.3%）、「手術の執刀機会」（35.0%）が挙げられました。昨年と比較すると、これらの項目は引き続き上位を占めており、特に「やりがいや充実感」（昨年：38.3%）、「施設の雰囲気」（昨年：21.8%）の割合が大きく上昇しています。専攻医の皆さんが研修内容や環境をこれまで以上に重視していることがうかがえます。皆さんには、自身の目標に合った研修内容を提供するプログラムを選ぶことをお勧めします。病院見学や説明会などを通じて、各施設の特色をよく理解し、自分に合った研修先を見つけてください。

産婦人科専攻を考えている皆さんには、本アンケート結果をぜひ参考にしながら、自分自身のキャリアプランに合った選択をしていただきたいと思います。日本産科婦人科学会では、皆さんの産婦人科専攻を全力で支援してまいります。ぜひ、産婦人科の未来を担う一員として、私たちとともに歩んでいきましょう。

以上

2025年 9月（令和7年度）

日本産科婦人科学会産婦人科未来委員会内若手委員会
リクルートアンケートワーキンググループ

未来委員会
林昌子、イズデプスキ アレクサンデル龍也
若手委員会
飯田祐基、秋田啓介、向井勇貴、山岡結香
青木康太、諫山瑞紀、榎本悠希、宮原英之